
綾子さん、ちょっと待って！！

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綾子さん、ちょっと待って！！

【Nコード】

N7718J

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

ある日の朝、痴漢と間違えられて側頭部に蹴りを食らって昏倒した北川三月。三月を昏倒させた張本人の、女子高生がその日転校生として目の前に現れて――？ 恋愛短編小説。

頬にべっとりつく、生温かな感触に目が覚めた。目を開くと、間近に母さんの顔。

唇を尖らせて、僕の頬にぶちゅぶちゅ接吻している。

オーマイチルドレン！ ラブっ。ラブっと不気味に呟いて接吻している。

同じく足から、指が這うくすぐったい感触。視線を下ろしてみると、静香がこちょこちょと僕の足をくすぐっている。

こちょこちょとご丁寧に擬音語までつぶやいて、リズムカルにくすぐっている。

「やめろって言うてんだろ、馬鹿母親、馬鹿妹！」

僕は裏拳を母さんに、かかと落としを静香に直撃させる。

二人の悲鳴が重なり、ドサツと床に倒れる音が響く。

僕はベッドから起き上がり、机に置いてある眼鏡を手に取り、かける。

「あいたたた……裏拳がまずことないじゃないの」

母さんは鼻の頭を指先でさすりながら、そう言って立ち上がる。

静香が「かかと落とし、顔面に食らうともろ痛い」と目の縁に涙を溜めて、同じく立ち上がる。

「ほら、着替えるから出てった、出てった！」

僕はそう急ぎたてて、二人を部屋から追い出す。

僕はため息をついた後に着替え始める。ワイシャツの腕裾に手を伸ばしたところでふと視線を感じて振り返りざま、目覚まし時計を取り、視線の感じる方へ投げつける。

扉の隙間から目を凝視させてのぞいていた静香の眉間にクリティカルヒット。

ぎょああ！ と悲鳴を上げて、静香の体のはじけ飛び、そのあと、階段を転げ落ちる音が聞こえる。

僕は再びドアを閉め、着替えを続行。ネクタイを締め終えると、靴を取って部屋の外へ。

階段を下りると、静香が、首を変な角度で曲げて、白目を剥いて気絶していた。

僕はしゃがみ、つんつんと静香の肩をつつく。

びくつと静香の体が痙攣した後、突然首が持ちあがった。

「ありや。こんなところで私、寝ちゃってたのかしら」

静香はそう言って、てて……と頭を押さえる。早苗がいつまでも立ち上がらずに僕をじっと見つめているので、「何してんの。邪魔で通れないんだけど」

と半目で睨む。

「お兄ちゃん、お姫様だっこして」

静香が両手を僕の方へ伸ばす。

「だっこ、だっこ！」

「するか！ なんもん！」

「だっこして、だっこしてくれなきゃ、私立ち上がれない！」

そう言って拳をぶんぶん振って、体をめちゃくちゃに揺らせてぐずる静香に、僕はしょうがないなあと静香の背中に手を回して抱きかかえる。

静香は心地よさそうに目を細め、こてんと僕の胸に頭を寄り掛からせる。

リビングに入ると、食卓に食器を並べていた母さんがこちらを見つめ、その途端、「まっ！」と目を見開いて飛びあがる。

「ずるい！ どうして静香だけ！」

静香は、母さんへ、勝ち誇ったような笑みを向けて、顎を反らす。それを見て、母さんが悔しげに、「きいー！」とエプロンの端を噛みしめる。

僕はゆっくりとソファーに近寄り、そこに静香を降ろした。

「ありがと、お兄ちゃん」

そう言って満面の笑みでウインクする静香。

「はいよ」

そんなことされてもあまり嬉しくない。

僕は食卓につき、朝食を食べ始める。向かいの席に空になった皿が並べられているのを見て、「父さん、もう行っただ？」とつぶやく。

そうよ、そうなのよ、と母さんが席につく。静香も続いて席につく。

——来る。

そう僕が予感したとおり、二人は箸を取った瞬間、自分の卵焼きを一つ掴み取り、僕に「あゝん」と差しだした。

僕は口を二方向に突き出して、それを口に入れる。すると、二人はうつとりとした顔で僕が噛み砕く様を見つめる。

しかし、その途端、自分の卵焼きを一つ犠牲にしたことを悔い、残念そうに皿を見つめ出す。

——来る。

そうもう一度予感したと同時に、ぱっと二人の箸が僕の皿に伸びてくる。僕はすかさず皿を取り、その攻撃を回避する。そして、皿に載った卵焼きをぱくりと一口で食す。

あゝと二人がムンクの叫びさながらに顔を歪めて、叫び出す。

そんなこんなで朝食を食べ終わると、僕は「行ってきます」とりビングを出る。母さんと静香が慌てて玄関先に立ち、僕を送り出す。
「いつてつらっしやい、お兄ちゃん」
「いつてらっしやい、マイチルドレン！」

いつもと同じ朝の風景を味わった後、僕はやれやれとため息をつきながら通学路を歩きます。

曲がり角を曲がろうとしたと同時に、思いっきり顔に何かがぶつかった。どこか弾力のある、柔らかいものが頬に触れ、僕は姿勢を崩して、そのまま前へ倒れ込む。

その時、きゅと下から声がして、僕は咄嗟に出した手を何かぶつくらとしたものの上につき、もう片手を平らなものの上につく。

その状態で目をつむること、数秒――。

ゆっくりと目を開く。その途端、僕は目を見開く。左手が、ふつくらとした丘の上に添えられ、右手が、彼女のスカートの下――つまり白くて花模様のあるその上に添えられている。

僕はゆっくりと視線を上げて、自分の腕の下で、仰向けに横たわる彼女の顔を見る。彼女はぎゅっと目をつむり、形の良い眉を寄せ、唇をゆがめている。しかし、うつすらと瞼を開き、真上にある僕の顔を見つめた。その次に、僕の手によって包まれた自分の胸を見て、さらに自分のスカートの中に突っ込まれた僕の手をみやる。

彼女の目が見開かれた。顔面蒼白の彼女の視線がまた僕の顔に据えられると同時に――。

「痴漢っ！」

バシンツ、と鞆で思い切り側頭部を叩かれる。僕の体は横へはじけ飛び、手の平から柔らかな感触とまっ平らな感触が消える。それと同時に、背中を道路脇の塀に激突。

僕は呻きながら背中をさすり、起き上がる。見ると、真っ赤な顔をした女子高生が、立ちあがって僕の顔を睨みつけていた。彼女は自分の身を守るようにぎゅっと腕を体に回して抱きしめている。彼女の体が小刻みに震え、ロングストレートの黒髪が左右に微震する。「ごめん。これは事故なんだ」

僕はそう言つて、訴えるように彼女へ手を伸ばした。その途端、急に頭がぐらりと来て、体が傾いた。

立ち眩みか――。

そう判断すると同時に、またもや僕の伸ばされた手が、そのふつからで柔らかな膨らみを掴んでしまった。

その感触を握りしめたまま、僕は恐る恐る視線を上げた。ワイシヤツがはちきれんばかりのその大きなふくらみから、ほっそりとした首筋、そしてなめらかな下顎、そのあとに彼女の引き結ばれた唇がきて、最後に――真っ赤に燃えたぎった炎のゆらめくぱっちりした目に行きあたる。

今度こそ弁解の余地がなくなった僕は、顔を真っ青にして、おそろおそろの伸ばされた手を引く。その際に、彼女の体がびくんとはねた。

「この……」

痴漢ッ！　そう叫んで、彼女は大きく足を振り上げた。一瞬彼女の白くてふつくらとした太ももがスカートの中からのぞき、彼女の足の甲が視界前方に差し迫るのを見届けると同時に――頭に鈍い音が走り、僕の意識は途絶えた。

目覚めると、体はベッドの中にあつた。目の前には見慣れない白い天井。

僕は体をゆつくりと起こす。ふと横を見ると、いつの間にもぐりこんだのか、静香が制服姿でスースー寝息を立てている。

なんで、静香がここに。

そうつぶやこうとした同時に、ベッドの周りに張り巡らされていた白い布の仕切りがめくれ、保険医の先生が顔を出した。

「あ、起きたみたいね」

優しそうな微笑みを浮かべ、その髪の毛長い美人の先生は仕切りをくぐり、僕の前に立つ。

「君が、住宅街の道路の上で倒れていたのを、通学中の生徒が見つけてね。すぐに私の方に知らせに来たの。それで保健室まで運んで来たというわけ」

保険医の先生は、長い髪を手で払うと、寝息を立てている静香を見下ろす。

「静香ちゃん、お兄さんのことがよっぽど心配だったのか、付き添いながらこうして寝ちゃってね」

そう言っ先生は、静香を見下ろして微笑む。

「それで、体の方は大丈夫かしら」

「ええ」

僕は頷き、そこでふと、意識を失う前の記憶がよみがえる。彼女

のふつくらとした大きな胸と、真っ白で花模様のパンツ、それと彼女の渾身の回し蹴り。

僕は手の平に残るあの感触を思い出して、赤面し、手をグーパーグーパーさせながらゆっくりとベッドから降りる。

「もう大丈夫です。少し頭を強くぶつけちゃったみたいで」

ぶつけたのではなく、蹴られたのだが。

「本当に？ 具合が悪くなったらすぐにまた戻ってきてね」

僕は、静香のことお願いしますと一礼して保健室を出た。

僕は頭を押さえて、軽く溜息を吐きながら、教室に向かい、扉を開いた。同時にホームルーム開始のチャイムが鳴る。

僕は友達に挨拶しながら窓際の一番最後尾の席に座る。鞆から教科書を取り出して、机に詰め込んでいると、隣の席に座っている委員長の木村さんが、「おはよう」と人のよさそうな笑みで声をかけてきた。僕も微笑んで「おはよ」と返す。そのうちがらがらと教室の前の扉が開いて、先生が入って来た。

みんな席につけると教卓から声を張り上げる。周りで群がっていた男女のグループが散り散りになって席についていく。

「前に言っていた例の転校生だ。紹介する。……清水、入ってこい」

「はい」と透き通るような声が聞こえて、女子生徒が教室に入ってきた。教卓に立ってこちらを真正面に向いた途端、僕は息を呑んだ。長いロングストレートの髪。大きくふくらんだ胸。すらりと長い足。

それは間違いようもなく、僕を蹴り飛ばした、あの少女だった。

僕は「げ」と声を漏らす。すると、壇上の彼女がふとこちらを見て、目が合った。

彼女の目が見開かれると同時に、その唇がかすかに動く。痴漢、とつぶやいたような気がした。

先生は黒板に、清水綾子という文字を書き、

「じゃあ清水、自己紹介してくれ」

と顎で促す。

清水は険しい表情のまま、黙ってうなずき、

「清水綾子です。これからお世話になります。よろしく願ひします」

彼女がお辞儀をすると、その長い髪が揺れる。男子からおおくと歓喜の声が上がった。

「じゃあ清水、北村の前の席に座ってくれ」

先生が僕を指差す。清水は黙ってうなずき、こちらに向かつてくる。

一瞬目が合い、彼女が一層目を細くさせ、こちらを睨み据えた。僕は体を硬直させたまま、彼女が席に着くのを見届ける。

「じゃあ、先生は授業に行くから。みんな、清水のこと頼んだぞ」
そう言つて先生が出ていくと同時に、みんなが席を立ち、清水さんの周りに集まり始めた。

昼休みになつた。席を立つ。前の席の周囲に女子生徒が群がっていて、「清水さん一緒にご飯食べない？」としきりに誘っている。

清水さんはおとなしい性格なのか、言葉もなくうなずくだけだった。僕はパンの入った袋を手にして、教室を後にする。一瞬、清水さんがこちらに振り向いた気がした。

僕は図書室に向かう。

午前中、授業を受けている際、気まずくて仕方がなかった。今朝のことを清水さんに謝ろうかと思つたけれど、彼女、一回も振り向かないし。

その背中を見ると、何かぴりぴりと張りつめた空気が漂っているというか、声をかけにくいことこの上なかった。

僕は大きくため息をつく。図書室の扉を開くと、「よつ、三月」みつきと明るい声がして、俯かせていた顔を上げる。

カウンターで、ポニーテールの長い茶髪を揺らせて、女子生徒がこちらに手を上げている。

「おう」

僕は覇気のない声でつぶやくと、扉を後ろ手にしめる。

「どうしたの？　なんか元気ないじゃん」

その声に、僕はカウンターの周りを迂回して、彼女の横に並び、空いた椅子に座る。

「朝っぱらから色々と厄介なことが起こってね」

「厄介なこと？」

「そう、厄介なこと」

僕はそう言つて、袋をカウンターの上に置き、パンを取り出して包みを開ける。

「ここで食べるの？　いけないんだあ」

女子生徒はそう言いながらも食べたそうな目でじっとパンを見つめる。

彼女は、香川美里といつて、僕の幼馴染だ。幼稚園から小学校、中学校、そして高校までずっと同じ学校に在籍してきた。両親同士で交流があり、よく家族ぐるみで付き合つてごはんを一緒に食べた。りする。

美里は容姿端麗で成績も優秀と、優等生ぶりを発揮して、長い間付き合つてきたけれど、今ではどこか遠い存在に感じられる。そんな美里と僕は図書委員をやつていて、今日はその当番の日だったりする。

「そつえば、三月のクラスに、新しい転校生が入ってきたんだつてね。どんな子？」

「おとなしくて、可愛い子だよ」

僕は依然と沈んだ声でそつつぶやく。

「三月が女の子のことそんな風に言うなんて、よっぽど可愛い子なんだね」

美里が感心したような声を上げる。可愛いには可愛いんだけど…。

そのまま三十分ほど美里とくっちゃべっていると、扉ががらりと響いた。そちらに視線を向けて、そこに立っている女子生徒の顔を

見て、僕は顔を固まらせる。

向こうもこちらに気付いたようで、おぞましいものを見る目つきで一瞥し、足早に部屋の奥へと向かっていく。

僕はため息をついた。横で、美里が「何何？」と興味深げに顔のぞきこんでくる。

「あの子だよ。例の転校生って」

「へー、確かに可愛い子ね」

そう言っただけで美里は俺の顔と清水さんの後ろ姿を交互に見る。

「やっぱり三月、ああいう子が好みなの？」

僕はうーんと頬杖をつき、

「苦手なタイプだな」

とぼつりとつぶやく。今朝食らった回し蹴りが頭にちらつく。

「ふーん」

美里はどこか思案げな顔でこちらを見つめ、再び視線を清水さんに戻す。

十分ぐらい経って、清水さんが突然一冊の本を手にとって、こちらに近づいてきた。

僕と目を合わせないように、下の方を見つめて歩いてくる。僕は急に緊張を感じて、体をこわばらせながら、彼女が近づくの待つの。

「この本、貸してもらいたいですけれど」

「ああ、はい。クラスと番号を教えてください」

美里が明るく応対する。九組の三十二番です、とつぶやく清水さん。彼女の顔には笑顔が浮かんでいるが、よくよく見てみると、どこか引きつっている。

彼女は貸出カードに本の名前を書き終わると、「はい」と愛想よく笑って美里に手渡し、それじゃあ、とカウンターに背を向ける。

美里はその背中が消えるのを見届けると同時に、こちらに振り向く。

「良い子じゃない。どうして苦手なの？」

「人にはどうにもできないものがあるんだよ」

僕はそう言って溜息をつく。美里はポニーテールの髪をぴよこんと揺らして首を傾げる。

帰宅。扉を開けた途端、突然父さんと母さんが飛び出してきて、

「これに着替える！」と突然スーツを手渡される。

僕が啞然と突っ立って、そのスーツを見つめていると、父さんが「ああ、もう」と痺れを切らしたように僕の腕を引き、リビングに連れていく。

そこで僕は抵抗する暇も与えられずに、服を脱がされ、その新しい、黒いスーツに着替えさせられた。

首に結ばれた蝶ネクタイを引っ張って、何これ、とつぶやいてみると、赤いドレスを着た母さんが寝室から出てきて、

「今からある人に会いに行くのよ！」

と鼻息を荒くして、張りきったように言う。

父さんもいつ間にか着替えたのか、僕と同じような黒いスーツに蝶ネクタイ、といった身なりでうなずき、

「そうだ。お前にとっては人生の進路を決定する、大事な場だ。心してかかれ」

と肩をぽんぽんと叩かれる。いや、心してかかれと言われましても。どこ行くの？

僕が疑問を浮かべてしどろもどろしているうちに、二階から静香が降りてきて——て、静香もドレスですか。

「お兄ちゃん、よく似合ってるよ」

静香はその長い髪を一つに結わえており、ドレスの裾を両手で持ち上げてみせる。

「それより、今からどこに行くんだよ」

僕がその声を張り上げるが、その質問はスルーされる。前から訳のわからない家族だと思っていたが、ここまで来るともっため息しかでない。

「さあ、行くぞ！」

父さんが突然拳を頭上へ突き出し、玄関の方へ歩いていく。おー！と同じように腕を伸ばして、母さんと静香が後に続いていく。

「おいおい……」

僕はしきりにため息をつきながら、仕方なく後に続いた。

父さんが車を出してきて、三人で乗り込む。

車が猛然と道路を走っていく中、「だから、どこに行くんだよ」と僕はもう一度叫ぶ。

すると、助手席に座っていた母さんが振り向き、

「今からね、あなたの許嫁に会いに行くのよ」

「ふーん」

僕はそううなずいてから——は？ と首を傾げる。

「許嫁って何それ！」

「今まで話してなかったけれどね、あなたには許嫁がいたのよ。父さんの親友の娘さんに、とても可愛らしい子がいてね。この機を逃したら次はないと思って、父さんと母さんが頼み込んであげたの」

「何勝手なことしてんだよ！」

そうこうしているうちに、車は目的地についたようで、駐車場ですぐ停車する。

さあついたわよー、と母さんが声を上げるとともに、三人がそそくさと降りていく。僕は呆気にとられていたが、とりあえず車の外へ。

料亭だった。高級そうな雰囲気なたたえていて、庭にある大きな池からちやばちやばと鯉が泳ぐ音がする。

僕は半ば引きずられるようにして料亭の中に入り、奥の間へと連れて行かれる。

その襖が開かれる。

「お待ちどうさん！」

父さんがそう叫び、席の片側についている男性へと手を上げる。

「おお、来たか、義男。そっちにいるのがお前の息子か」

「そうなんだよ。さ、入れ三月」

僕は背中をどんと押され、体をつんのめらせて前に出る。とつと、と慌てて立ち止るが、ふと男性の横に座っている女の子に見覚えがあることに気付き、固まる。

「ま……さか……」

二人の声が重なった。着物姿で、黒く長い髪を一つに結わえて垂らしているその美人は、見間違いようもなく、清水さんだった。

「さあさあ、席についてくれたまえ」

男性が手を振って、促す。

啞然とつつ立ったままの僕の横を、失礼します、と父さんたち三人が通り過ぎていく。

「どういうことだよ、父さん！」

僕は喉仏をのぞかせて叫ぶ。

「どういうこと？」

同じく清水さんが険しい顔で男性を問い詰める。

「「どう言う事も何も、そういうことだよ」「」

父さんと男性の声が、妙にはもる。

「「なあ」「」

「やってられないわ」

と立ち上がりかけた清水さんの腕を男性がつかんで、無理に座らせる。

「まあまあ。話だけでも聞きなさいって」

「私、こんな男と結婚するのなんてぜったいに嫌だからっ」

学校ではおとなしかった清水さんが、感情を剥きだしにして僕を睨みつける。

「こんな痴漢と一緒にいる女の人なんているはずないわ」

僕の胸にぐさぐさと言葉の羅列が突き刺さる。何もそこまで言わなくても。

「お兄ちゃん痴漢だったんだ。でも私、それでもお兄ちゃんのこと

好きよ。例え痴漢でも」

静香がフオローになってないことをつぶやく。

「まあまあ、座れって」

父さんが僕の腕を引っ張り、清水さんと向かい合わせに座らせられる。

清水さんは上目づかいに僕を睨みつけている。僕はかちこちに固まった体をなんとか座布団の上に制止させると、

「勘弁してくれ」

とやつのことで一言をつぶやく。

「ここの料亭の料理、格別なんだぞ。さあ、食べた食べた」

男性が手を差し出して促してくる。この人が清水さんの父さんであることは間違いないのだけれど、うちの家族のように螺子が一本も二本も抜けていることは、同じく間違いないだろう。

いただきます、と母さんと静香が胸の前で手の平を合わせて、食事を始める。いつの間にか父さんと清水さんの父親も酒を酌み交わしている。

僕はちらりと清水さんの方を見た。彼女はやってられないわという顔で、料理に手を付け始めている。僕もとりあえず、いただくことにした。

それにしても、料亭なのにスーツに蝶ネクタイかよ。全然合わねえよ。

僕は刺身を食べながら、もう一度ちらりと清水さんを見る。彼女も僕の方を見ていて、目が合う。

僕は仕方なく愛想笑いをする。すると、彼女は再びおぞましいものを見た目つきになって目を逸らす。こりゃだめだ。

僕は溜息をついて、料理を味わっていたが、ふと横を見て、父さんたちの姿がいつの間にか消えていることに気付く。

「はっ！？ どこに行ったんだよ！」

僕が素っ頓狂な声を上げると、清水さんが静かに、

「さっき爪先立てて、こっそり部屋から出て行ったわよ。私たちを

二人つきりにさせる為に、別の部屋に移ったんじゃない？」
そうつぶやく。

僕は額に手を当ててため息をつき、清水さんの方を向く。

「清水さんも大変だね。変わった父さんを持つて」

「あなたに言われたくないわ」

ぐさりと再び胸を突き。

「急に料亭に食事に行くって言われて来てみれば、あんたがいるし。どうなってるんだか」

清水さんは、はあ、とその形の良い唇から吐息を漏らして、ご飯を一口食べる。

僕は清水さんの表情をうかがいながら、ぼつりとつぶやく。

「今朝はごめん」

その声に、清水さんが手元に落していた視線を上げた。

「わざとじゃないとはいえ、あんなことしちゃって、本当にごめん」

そう言って頭を下げる。すると、「変なこと思い出させないで」

と声が降って来た。顔を上げると、あの光景を想像してしまったのか、頬を赤くした清水さんが、口を尖らせていた。

「あんたも、大丈夫？ 思いっきり頭蹴ったけど」

ぼつりと清水さんが言いにくそうにつぶやく。

「あ……ああ。なんとか。今も生きてる」

そう言っていると、清水さんはぼつが悪そうに視線を逸らせた。なんていうか、学校にいる時と雰囲気が違うなあと思う。学校にいる時は、男子に対して、あんた、なんて呼び名は使わなかったし。僕だからだろうか。

その時、ふと、強い焦げ臭い匂いを感じた。なんだろうと思って視線を部屋にめぐらせるが、清水さんも同じことを思ったのか、視線を脇に向けて鼻をひくつかせている。

なんか、焦げ臭くない？ そうつぶやこうとした途端、きゃー！と女性の悲鳴が廊下から聞こえた。

僕は悪い予感がして立ち上がり、廊下に行く襖を開けた。そこに

は。

廊下一面にごうごうと赤い炎が燃えたぎっていた。縦横無尽に炎がゆらめいて、柱に飛び散り、床に広がり、空気を熱してこちらに焦げ臭いにおいを押し出している。

僕は青白い顔で背後にいる清水さんに振り向く。

清水さんは蒼白な顔でうなずき、「逃げましょう」とつぶやいた。その途端、僕は清水さんの手を取って、走り出す。反対側の廊下に出る。

どこかで「火事だ！」と男の叫び声がする。僕は清水さんの手をにぎったまま、走った。すると、その時、横から柱が倒れてきた。それは僕の後ろにいた清水さんに迫って、彼女は咄嗟に地面を蹴り、後退した。ずしん、と重い音を立てて柱が床に倒れる。

「清水さん！」

僕は叫んで清水さんに駆け寄る。清水さんは床の上に座り込みながら、片足を押さえて顔をゆがめている。

「どうした!？」

「足をひねっちゃったみたい……」

そう言つて、く……と痛そうに片目をつぶる。

僕はすぐに彼女の前に膝をつき、そつと彼女の背中に手を回す。

何? と彼女が目丸くする。

「僕の首につかまって!」

僕はそう言つて彼女を抱え上げる。今日で二回目のお姫様だつこ。

「な、なにをするのよ!」

腕の中でもかく彼女を「いいから、じつとして!」となだめすかしながら、僕は走り出す。

「馬鹿っ、どこ触つてんのよ!」

べしつと頬を叩かれる。僕は目をつむって我慢しながら、走り続ける。

手には彼女の柔らかい肌の感触。首筋には彼女の生温かい吐息がふきかかる。こんな状況じゃなかったら、胸を高鳴らせるんだらう

が、今はそんなことより――。

早く屋敷の外へ。そう心中でつぶやいた時、いきなり前方から小柱が倒れてきた。腕の中で、清水さんが短く悲鳴を上げる。

僕は咄嗟に体を回して、背を向ける。背中に重い感触がぶち当たる。僕はくつと眉をゆがめて衝撃に耐える。

からん、と柱が音を立てて、床に倒れる音がする。

「ちよつと……あんだ……」

「大丈夫。行こう」

僕はそう言つて、再び体を回して前に向き直ると、走り出した。

屋敷の外で、父さんたちが慌てた様子で待っていた。僕が玄関から走り出てくるのを見ると、「マイチルドレン！」と母さんが走り寄ってくる。しかし、僕の腕の中の清水さんを見ると、途端にやけた顔つきになる。

清水さんは、「もう平気だから降ろして」とつぶやく。僕は赤くなりながら、そつと彼女を降ろした。

なぜか、清水さんの家に行くことになった。僕の背中 of 怪我のことを言つたら、清水さんの父親が、「それはいかん！　すぐに手当てしなければ！」と料亭のすぐ近くにある清水さんの家に向かった。家に着くと、彼に勧められるままに奥の一室に入り、それに清水さんが続いたかと思うと。

「二人でよい夜を！」

威勢の良い声と共に、ドアが閉められた。

「ちよつと！」

清水さんが慌てて、ドアを開こうとするがびくともしない。ドアの向こうで、何か重い物を置く音がする。

僕はくるりと後ろに向いて、部屋の中を見渡した。部屋の中には、ダブルのベッドが置いてある。

「まったく父さんつたら……いい加減にしてよ」

清水さんがため息交じりに部屋の奥の棚に近づき、何かがさこそ

とやり始める。

「今日はもううちに泊ってもらう他ないわね」

後ろに振り向かずになんと言う清水さん。

僕は黙って頷き、ベッドの側にあるソファ―に腰を降ろす。

「僕がソファ―で寝るよ」

「そうしてくれる？ 私、ふかふかのベッドで寝ないと眠れないのよ」

そう言っ、くるりと体の向きを変えて、清水さんが近寄ってくる。その手には、救急箱が抱えられている。

清水さんはテーブルに救急箱を置くと、「背中見せて」と気だるげな声を出す。僕は「う、うん」とどこか上ずった声を上げて、彼女に背中を向ける。

服がめくり上げられ、背中があらわになる。そこに清水さんが消毒液を浸らせたガーゼを当ててくる。

「ごめんね。うちの父さん、一人で突っ走るところがあるから」

僕はその言葉に、慌てて首をふる。

「いや、うちの父さんも一枚も二枚もかんでいるから。清水さんのお父さんのことも言えないよ」

清水さんは「そうね」とつぶやいて、湿布を肌当ててくる。

「今日はありがとう」

ぼつりとつぶやきが聞こえた。

「助けてくれて。……とりあえず痴漢じゃないことだけはわかったわ。安心して」

そう言われて、僕は「清水さん……」と嬉しい気持ちになって振り返る。振り返った途端、なんとなく上げた手が、彼女の胸元に当たってしまった。「あ」と僕はつぶやきを漏らす。

胸元を手の平で包みこまれた清水さんが、眉間にしわを作って、「前言撤回」と低い声を出した。

翌日。清水さんと並んで登校していると、校門の中で、「何——！」と叫び声が聞こえて振り向くと、それは案の定、高橋だった。

高橋は、金髪の長髪をかきむしりながらこちらを見て、「なんじやありゃあ！」と叫び声を上げている。

「なんじゃもんじゃもないだろ」

僕が半睨みすると、高橋は「かー！」とヒステリックな声を出して一層頭をかきむしり、

「どうしてお前が、俺の心のアイドルと登校してるんだよ！ 何だお前、普段は純粹少年のフリをしてるくせに、転校二日目の彼女をナンパかよ！ やってくれるぜ！」

「誰もナンパなんかしないし、お前と一緒にするな」

そう言って歩き始めると、横で清水さんが「何アレ」と面白いものを見るような視線を高橋に向ける。

「気にするな、ただの高橋だ」

ただの高橋と位置付けられた当の本人は、NO！ と叫びながら、校門でのたうちまわっている。まあ、あと数分もすれば落ち着くだろう。

教室に行つて席に着き、水筒を取り出して一息ついていると、たまた、と軽快に走る音が廊下から聞こえてきて、僕は悪い予感がして眉をひそめる。

キキー、と教室の前でブレーキをかけて静止する音が聞こえてきたかと思うと、ずんずんと女子生徒が血気盛んな様子で教室に入つて来た。

その顔を見る。予感的中した。

「三月君！」

彼女は僕の前まで歩いてくると、腰に両手を当てて僕に怒りの眼差しを向けて静止した。突然立ち止ったので、彼女の大きな胸が足

並み揃えて大きく揺れる。

「どうということなの！」

「どうということって、何がです？」

僕がおそろおそろといった様子でそう言つと、彼女はくるくると巻きあげられたカールの髪を弄びながら、

「今日、美少女と一緒に登校していたってどうということなの！」
とつぶやいた。

ああ、そのことですか、と僕はため息をつく。おそらく、高橋が憂さ晴らしに、そのことをこの人に吹っ掛けたのだらう。

「私というものがありませんが！　浮気はだめよ、三月君！　三月君は私のものだから！」

そう言つて、突然ぎゅつと僕を抱きしめてくる女子生徒。毎度のことながら、顔が胸の間に挟み込まれて満足に息ができない。

この人は、橋本愛梨はしもとあいりと言つて、この学園の生徒会長をやつていて僕の一個上の先輩。何故だが僕に付きまとい、今では熱烈なストーカーと化している。

ふと愛梨先輩の視線が僕の前の席へと移される。

「あなたが、清水さんね？」

愛梨先輩は僕の顔を胸に埋めたまま、清水さんの方に向き直る。眉を寄せて、頬をふくらませている。

「転校二日目にして、三月君を誘惑するとは良い度胸ね」

そう言つて、愛梨先輩はびしつと清水さんを入差し指で差す。

「勝負よ！　どちらが三月君を振り向かすことができるのか」

清水さんは、面倒くさげな顔をしながら、「はあ……」と気だるげにつぶやいている。

「何よその、勝ち誇つたような表情は！　三月君はだれにも渡さないんだからっ！」

そう言つて、愛梨先輩は僕を一層強く抱きしめる。ギブギブツ、息できない！

僕は真っ赤な顔で、ぼんぼん、と愛梨先輩の背中を叩く。それを

どう勘違いしたのか、愛梨先輩は途端に嬉しそうな顔を浮かべ、「ほら、三月君も私と離れたくないって！」

と僕の頭をすりすりと愛しげに撫でてくる。

その時、僕の肺に残っていた酸素が切れ、唐突に視界が黒く闇に埋もれていく。

意識が遠ざかる中、愛梨先輩が悲鳴を上げ、「三月君！ 三月君！」と頬を叩いてくるのを感じていた。

図書室の扉を開けると、昨日と同じように美里が手を上げて、「よう、三月」と笑みを向けてくる。

僕はなんとなく息をつきながら扉を閉めて、カウンターに座る。

「何？ 今日はお弁当？」

美里が僕の手に掲げられたピンク色の包みを見て言う。

「愛梨先輩のお手製の弁当だよ。美里も食べる？」

食べる食べる！と言う美里。僕は包みを解いて、重箱をあらわにすると、段を取って並べる。

「わお。豪華な弁当。橋本先輩、本当に三月のこと好きなんだねえ」そう言いながら、ぱくりと海老フライを食す美里。

その時、がらりと扉が開いて、清水さんが入って来た。カウンタ―に重箱を並べて仲良く弁当を突き合っている僕たちを見ると、少し眉を上げる。

けれど気にした風もなく、奥の方へ歩いていく。

「今日も来たね、清水さん」

美里がもごもごいわせながら、そうつぶやく。

「ああ。本が好きなんだってさ」

「だってさ、っていつ彼女と話をしたわけ？」

「色々あるんだよ、僕にも」

そつ言いながら僕はおにぎりをかじる。

まさか、清水さんの家に泊って、朝食の時にそんな会話をしたな

んで、口が裂けても言えない。

「そう言えば、うちのクラスにも転校生が来るらしいよ」

「ふーん。女？ 男？」

美里はそれはわからないけど、とつぶやいてちらりと部屋の奥の方へ視線を投げかける。

「それにしても、清水さんっておとなしい子だよねえ。なんていうか、清純なイメージがあるのよね。お嬢様って感じ？」

そう言っただけで口の中に運ぶ美里。

僕も昨日まではそう思っていた。けれど、そのイメージは実際彼女と面と向かって話してみると粉々に砕け散った。

学校にいる間の普段の彼女は、とてもおとなしくて、美里の言うとおり、清純なイメージがあるが、本当のところは、とても気丈な性格の持ち主で、ズバズバと物事をはっきり言うし、積極的な姿勢を見せてくる。

要するに、昼間の彼女は仮面を被っているわけで。

僕はおにぎりを食べ終わると、水筒をコップに傾けて紅茶を注いだ。その湯気の向こうに、熱心に本をめくる彼女の姿がある。

HRが終わって、生徒がほとんど出ていってしまい、静まり返った教室。僕がゆっくりと教科書類を鞆に詰め込んでいると、ふと隣の席の、委員長の三木さんが鞆を取って声をかけてきた。

「北村君、ちょっと良い？」

上目づかいにそう言っただけで、三木さんはきょろきょろと周囲を見回してから、声をひそめて言ってきた。

「この後、ちょっと良いかしら」

「別に良いけど」

僕は鞆にすべて詰め終えて、それを肩に提げながら、そう言う。すると、三木さんはよかったあ、と嬉しそうな顔をする。ショートヘアの髪が、その際にさらっと柔らかく揺れる。

「ついてきて」

そう言つと、三木さんは廊下へ歩き出す。僕は何か手伝わせる気なのかも、となんとなく予想しながらその後を追う。

三木さんは廊下を通り過ぎて、暗く人通りのない曲がり角まで来ると、突然足を止めた。振り返る。

「あのね、北村君。突然なんだけど……」

そう言つて、決意を固めるように彼女はきつと眉を寄せて、それから大きく息を吸つて、言った。

「あなたのことが好きです。付き合ってください」

そう言つて頭を下げた三木さんを、は？ と間抜け面で見る。

「ずっと好きだったの。前のクラスで一緒になった時からずっと」

そう言つて三木さんは顔を上げ、真剣なまなざしでじつと僕を見つめる。僕は返す言葉が見つからなくて、口をぱくぱくと開閉させる。

「私じゃ、駄目……？」

どこか潤んだ瞳で三木さんはそう言つてくる。

三木さんと付き合う。それは僕にどんなものをもたらしてくれるのか。

三木さんと付き合ううちに、僕も彼女のことを好きになるんだろうか。

そう思考をめぐらせてみるけれど、今考えたところで、答えは見つかりそうもないように思える。

僕はゆっくりと息を吸った後、口を開く。

「か……考えさせてくれるかな」

その言葉に、三木さんは笑ったまま、うなずき、

「うん。私、待つてる」

そう言つて静かに唇を重ねてきた。

僕の目が見開かれる。

その時視界の隅に、人影が立っているのが見えた。目を動かすと、清水さんが目を見開いてこちらを凝視しているのがわかる。彼女は見てはいけないものを見てしまったように、ばつが悪そうに目を逸

らして、すぐに廊下を駆けていってしまった。

僕は唇を包み込む、生温かな、それでいて柔らかい、みずみずしい感触に、そっと目を閉じた。

夕食の間、静香が「お兄ちゃん、あゝん」と箸でからあげを掴んで差しだしてきても、取り合わずに憂鬱な気分で黙々と食べた。

その間、何度もあの時の柔らかい唇の感触を思い出し、顔を赤らめる。三木さんってあんな積極的な人だったんだ、なんてことをぼんやり思いながら、僕は食卓から去る。静香が、「お兄ちゃん顔赤いよ」とピーマンを食べながら僕の後ろ姿へつぶやく。

僕はうるさいっ！　と言いながら階段を上がろうとすると、その時チャイムが鳴った。僕は、はい、と声を上げながら、玄関のドアを開ける。すると、そこには。

「清水さん……」

彼女が、ボストンバック一つを腕から提げて、俯き加減に立っていた。ちらりと上目づかいに僕を見ると、彼女は言いくそうに口を開く。僕は一瞬、キスしていたところを清水さんに目撃されたことを思い出して、顔をこわばらせる。

「あのね。単刀直入に言うけど」

泊めてくれない？　そう彼女は言った。僕は何を言われたのか、その意味を判断しかねて、首を傾げる。

「父さんと喧嘩したの。それで家出して来たんだけど、泊るところがなくて」

そう言って、視線を下げる清水さん。僕はぽかんとした顔を浮かべたまま固まっていたけれど、ふと我に返り、困ったなあ、とため息をつく。

「そうは言われても……悪いけど」

そう言おうとした時、突然後ろからとび蹴りを食らって、僕は前のめりに倒れた。

静香が、僕の背中の上に着地して、にやりと八重歯をきらめかせ

て笑い、

「いいわ。大歓迎よ」

そう言って、後ろに振り返る。すると、そこには母さんが柱に寄りかかって立っていて、静香の視線に黙ってうなずいた。

「綾子ちゃんなら、大歓迎よ」

そう言って、親指を立てる母さん。清水さんの顔がぱつと明るくなる。

「お世話になります！」

そう言って、深深と頭を下げる。おい、何勝手に決めてんだよ！と僕は静香の足に踏まれながらうめき声を上げる。

「さあ、入って入って。今、ちょうど夕飯にしてたところなんだけど、綾子ちゃん、ひよつとしてまだご飯食べてない？」

「はい」

「なら、ごちそうしちゃうわよ」

「ありがとうございます！」

何やら背後で母さんと清水さんが仲良く打ちとけた様子でしゃべっているが、静香の体が重くて、とてもじゃないけど首を振り向けられない。

静香は、口笛を吹きながら、「よつと」と僕の体から飛び降りる。僕はやつとのことで静香の重みから解放され、息を吐く。立ち上がると、静香が何やらこちらを見て、イッシッシと笑っている。

「なんだよ」

僕が睨むと、静香は唇を吊りあがらせて笑い、

「お兄ちゃん、チャンスよ。美少女と一つ屋根の下で暮らすなんて千載一遇のチャンスよお」

そう言って時折こちらに振り向きながら、家の中に入っていく。

僕は顔を真っ赤にして、「静香あつ！」と叫びながら、その背中を追っていく。

自室でベッドに横になりながら、僕はため息をつく。最近いろん

なことが多すぎて、頭がてんやわんやしている。清水さんと許嫁の関係だと暴露されたり、告白されてキスされたり。もう色んな事ありすぎ……。

僕はもう一度ため息をつく。そして、三木さんのことを考える。

三木さんはクラスの委員長をやっていて、とてもまじめでクラスのみんなに慕われている。頭もよくて、容姿もなかなかのもので、クラスの男子に密かに人気がある。

そもそも何で僕なんかを好きになったんだろう。

僕はそう考えながらちらりと鏡を見て、自分の顔を見つめる。自分で言うのもなんだけど、僕は結構顔が整っている。外見だけを見て、僕を好きになったんだろうか。もしそうだとしたら、僕は三木さんと付き合うことを断るだろう。けれど、三木さんってすごくまじめだし、外見だけで判断するような人じゃない気がする。だけど、僕の内面ってそれほど良いとは思えないし……。

僕は、あゝゝ！ と頭をくしゃくしゃに掻きながら、ベッドの上をのたうちまわる。

その時、ふと懐かしい少女の姿が、頭に浮かんで僕はぴたりと体の動きを止めた。ワンピース姿の、頭に麦わら帽子をかぶった黒髪のショートヘアの女の子。すごく整った顔つきをしていて、そこに浮かんだ表情はどこか大人びていて、その小さな体とは不釣り合いに落ち着いた雰囲気。彼女が彼女の周りに漂っていた。その女の子が小首を傾げて、にっこりとほほ笑んでくる。そこで僕は「睦月」とつぶやく。

たぶんあれが僕の初恋だった。小学校二年生の春、突然の別れが来て、僕は泣き叫びながら彼女を見送った。遠ざかっていく列車の一つの窓から顔を出した彼女が、にっこりといつもと変わらぬ笑みで僕に手を振っていたのを覚えている。彼女は今、どうしているだろう。

急に懐かしく切ない感情が胸に渦巻きだし、僕は「あーもう」と、また頭をくしゃくしゃに掻きながら、顔を洗いに一階の洗面所に行

った。扉を開けた途端、ふわりと甘ったるい匂いが空気の流れに乗って、僕の鼻先まで漂ってきた。僕は鼻をひくつかせてみて、それがシャンプーの匂いだとわかったと同時に、ゆっくりと視線を上げると、そこには。

「……あ」

清水さんが、バスタオル一枚を体に巻きつけて、洗面所の鏡と向かい合って立っていた。ちらりと鏡越しにこちらに視線を向ける。

……そうだった。彼女、今夜からうちに泊るんだった。

僕はゆっくりと後ずさりし、「失礼しましたー」と扉を閉めようとする。その途端、扉の隙間から石鹸が飛んできて、僕の鼻がしらを直撃する。

ぐはっと僕は呻き声を上げながらのけぞる。その時、飛びあがった石鹸が僕の足元に落ち、僕は不覚にもその石鹸を踏んでしまう。

つるつと床を滑った僕の体は、閉めかかった洗面所の扉を開け放ち、そのまま加速して清水さんの体に迫る。

清水さんは声もなく目を見開き、両腕で体をかばおうとする。その時、彼女の腰に巻かれていたバスタオルがするりと床に落ちた。

僕は彼女の足元にずでんと頭から倒れた。

「痛って……」

頭を押さえながらちらりと視線を上げる。見てはいけない！ 見たら殺される！ そう頭の隅で警報が鳴っているにもかかわらず、不可抗力で僕は彼女の肢体を見つめてしまう。

すぐ眼前にあるふつくとしたふくらはぎ、少し玉の汗が浮いたつるつるの白い肌。彼女の腕に抱え込まれている二つの大きな胸。

僕の鼻から赤い雫がぼたりと床へ落下する。

清水さんは青白い顔のまま僕の顔を見下ろして、「な……な……」と震える声を出しながら、体を微動させている。

「この……」

変態！ そう言って、清水さんが足を振り上げた。その艶めかしい足の甲が僕の顔面に激突し、僕の体は後方へのけぞり、吹っ飛ぶ。

仰向けに倒れると、視界の隅で清水さんが顔を真つ赤にして息を切らしたままこちらを見下ろしているのが見えた。胸の谷間が再び彼女の腕の中からのぞき、僕はもう一筋、鼻血を口元に垂らした。なんか僕、いつも失敗してばっかだ、と消えていく意識の中で思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7718j/>

綾子さん、ちょっと待って！！

2011年10月5日02時30分発行